同和教育における子ども会活動の現状と課題

――指導員青年の聞き取りから――

The Present Situation and Problems of Children's Group in Dowa Education : Through Interview of Buraku Young Instructors

金　　泰泳

序

いま同和教育は、大きな転換期にあるといわれている。1997年３月に「地域改善対策特定事業に係る国の財政上の特別措置に関する法律」の期限が切れ、５年間の経過措置を経て、「同対審」答申以降30年以上にわたり続けられてきた特別施策は2002年からは、同和地区及び同和地区住民のみを対象とした特別措置は一切うち切られることになっている。しかし一方で、地区生徒と地区外生徒間の学力格差は依然として存在し、また社会における差別事象もあとを絶たないという現実がある。施策の終結が、同和問題の終結を意味するものでないことは明らかである。環境改善などの物的事業や個人給付事業などについては、一般施策として引き継がれ、教育や啓発については、人権教育の重要な柱として再構築される方向が打ち出されている。この「転換期」にあって、私たちはどのような方向に向かって、またどのような方法で、同和教育を進めていけばよいのだろうか。本稿では、同和教育のなかで大きな役割をはたしてきた「子ども会」にスポットをあて、子ども会指導員の青年たちからのインタビューをもとに、同和教育の現状と課題を明らかにしていきたいと考える。

1.「同和教育」と「部落解放教育」

まず、「同和教育」と「部落解放教育」という用語の概念について整理しておく。

同和教育とは部落差別を中心にあらゆる差別をなくそうとする教育であり、その活動には、部落外の差別意識をなくし部落内外の豊かな関係を広げることだけではなく、教育機会にみられる部落内外の不平等、部落の子どもたちの相対的な〈低学力〉問題など、部落差別を原因として部落内に生じるさまざまな問題状況を教育的に解決しようとする取り組みすべてが含まれる。同和教育という名称が再び広く使われるようになったのは、52年に文部省が〈同和教育について〉という次官通達を出し、53年に各地の教育関係者により全国同和教育研究協議会（全同教）が結成されて以後である。

50年代、同和教育における部落の子どもの教育権保障という課題に取り組もうとする潮流、すなわち生活のなかに差別があるという方向性がしだいに広く受け入れられ、65年から全同教は〈差別の現実から深く学ぶ〉というスローガンを掲げるようになった。60年代になると、同和教育の名のもとに、政府が〈教育の中立性〉を強く押しだして、同和教育運動が教育と運動とを結びつけようとすることに批判を強めた。そのため、同和教育という概念を使用することに解放運動側からの批判が強まった。

60年代後半、教育運動の性格を的確に表すために「部落解放教育」あるいは「解放教育」という名称が解放運動関係者によって唱えられるようになる。70年代、教育行政が同和教育という概念を用いて施策を行うようになったが、その一方、現場の教育関係者や解放運動においては、部落問題だけでなくあらゆる差別からの解放をめざす教育という意味合いで解放教育という概念が広く用いられるようになった。

こうした経緯をもつ「同和教育」と「部落解放教育」であるが、本稿では経緯をふまえつつも、その主題が、主に部落解放運動団体の手によって積極的に担われてきた子ども会活動のため、「部落解放教育」という用語

を主として使用したい。

2．部落解放教育における子ども会の役割と位置づけ

部落解放教育では子ども会活動が重視されてきた。部落差別からの解放をめざして、被差別部落で組織されている子ども会を、部落解放子ども会とよんできた。

部落の子どもたちにさまざまな生活体験をさせること、そしてそれをとおして部落差別を捉えさせ、それを自己との関係において考えさせること、自己のおかれた社会的立場を自覚させること、それが部落の子どもたちに欠かすことのできないものであり、それを基礎として学校教育は成立すると考えられてきた。解放子ども会は、部落の子どもたちが自らの置かれている社会的立場を自覚し、真に部落差別からの解放運動を担いうる人間形成をめざす場として位置づけられてきた。そうした位置づけのもとに文化活動・スポーツ活動・学習活動・社会的活動などが展開されてきた。だが近年、子ども会活動も多様化し、部落解放運動の側面とともに学童保育的側面、学力保障の側面、社会教育的側面などに広がっている。

子ども会では、各地域によってさまざまな取り組みがおこなわれているが、共通点としては、子ども会を ①学習環境を保障する場 ②生活で直面する問題を共有し解決をはかる場 ③差別とは何かを学び、反差別の思想を学ぶ場 ④部落出身者としての仲間意識を育て規律を学ぶ場、といった視点が基本にはある。そしてこうした認識の上にたって、さまざまな活動が展開されてきた。

また子ども会は、地域の保護者の教育要求を組織化するという役割も担っていた。部落の保護者たちは、自らが教育の機会を奪われてきた。そうした自らの体験を子どもたちにはには繰り返させたくないという切実な願いをもっている。しかし部落の子どもたちの教育達成をめぐる地区外との格差は克服されたとはいえない状況にあり、そこから生まれる保護者の教育への願いは切実なものである。そうした保護者の声を吸収し組織化して、保護者と学校を結びつける役割が子ども会にはもとめられてきた。

3．転換期の子ども会

こうした意義のもと長年展開されてきた子ども会活動であるが、近年、さまざまな課題が浮き彫りになっている。そうした課題を、子ども会活動に指導員として関わってきた青年の子ども会経験をふくめたインタビューから明らかにしていこう。

（1）指導員青年の子ども会経験

①Ｓさんの体験

Ｓさん（34歳・女性）は、大阪府北部のある同和地区に生まれ育った。Ｓさんは現在、地区の青少年センターに勤務する市の職員であり、子ども会指導員のキャップの役割をしている女性である。Ｓさんが現在の仕事につくきっかけとなったのは、彼女の生い立ちと切り離しては考えられない。

Ｓさんが自分の生まれ育った地域を、「被差別部落」と自覚したのは小学校４年生のときであった。しかしそれは「あまりいい出会いではなかった」と彼女は言う。彼女はそのときの記憶がいまだに強く残っている。

他地域の友だちの家に遊びに行ったときに「何々さん、遊びましょ」と玄関口で彼女が呼びかけていると、友人が「少し待ってて」といって奥の部屋に入っていった。Ｓさんは玄関先で待っていたが、すると奥から、「友だちが来たから遊びに行っていいか」という友人の問いに対して、その母親が、「どこの子や」とたずねているのが聞こえた。友人が「団地の子や」と答えたところ、母親は少し声を荒げて、「なんで、そんなとこの子を連れてきたんや」といっていた。その地域で「団地」といえば、同和対策によって建てられたいわゆる「解放住宅」ということであり、そこに住んでいるということは部落出身であるということを意味することになるのである。

私自身は小学校４年生ですから何をいわれているかそのときはわからなかったのですが、彼女が出てきて「今日はごめんやけど遊ばれへんわ」ということで、その日は彼女の家から帰ったのです。そう言

われたものの私のなかでは悶々としたものがあったので、家へ帰ってから母親に「今日こういうことがあったんやけれど、どういうことかな」って相談したら、うちの母親が一言だけ「それはな、うちが部落やからとちがうか」といったんです。そのときから私のなかでは、なんで部落やったらそういうことをいわれなあかんのかと、そういうふうな出会いだったんです。

こうした経験を機に、なぜ自分たちはこうした扱いをうけるのか、なぜ部落問題は存在しつづけるのか、ということを知りたいという思いでSさんは今日までさまざまな活動に携わってきた。そして現在の職業に就いた。

部落問題とはなにか一言で語りなさいといったら、いまだ正直なところ語れないんです。いまだになぜかという思いがあるから一言で語れないんですが、自分のそういった経験とか体験を積み重ねると、やはり不合理な経験なんです。自分に落ち度があって、自分に理由があってこういうことが引き起こされたのではないというのが、年を重ねるごとにいちばん最初に経験した小学校4年生の体験を振り返れるような機会を自分のなかでつくっていくことによって少しずつ考えられたりするのだなというふうに思っているのです。

「不合理な経験を振り返れるような機会を自分のなかでつくっていくことによって少しずつ考えられたりする」、そうした場としてSさんに大きな影響を与えたものが子ども会であった。小学生、中学生時代の子ども会活動、そして「高校生の会」における活動のなかで、Sさんは小学4年の体験の答えを探してもとめてきたのである。しかしSさんが今日まで何のためらいもなく活動に参加してきたわけではない。「どこかで頭を打って、私は自分が部落民だというのを18、19歳ぐらいまでは否定してきたんです。地域から出ていって知らん顔しようと思っていたものの一人ですから」と言う。そうしたさまざまな葛藤や紆余曲折を経て、Sさんは子ども会指導員という仕事を選ぶ。

そういった思いを自分の後輩である同じアイデンティティをもつというか、悩み方とか表現の仕方は違うけれども、つまづきそうになるところがよく似ているような後輩たちと一緒に生活するような仕事をやっていきたいなと思うようになって…。

②Mさんの体験

Mさん（34歳・男性）は和歌山県S市の被差別部落で生まれ育った。Mさんが小さい頃は地域に子ども会はなかった。地域に子ども会ができたのはMさんが中学２年のときであった。仲のよかった先輩たちが皆、子ども会に参加しはじめ、Mさんもそれについていくようになったのがきっかけであった。そしてその子ども会で部落問題を学習するようになる。子ども会に参加する前から。自分の生まれ育った地域が他地域から差別をうけているということはわかっていた。しかしそれがなぜなのかということはわからなかった。子ども会における部落問題学習でMさんは部落問題の歴史と現状を知る。そして高校生なる時点で、そうした学習は子ども会でするだけでなく、自分自身でも意識的にしていかなければならないものなのだと考えるようになる。

子ども会で知り合う先輩や友人たちとの出会い。子ども会はMさんにとって、単に部落問題を学習するためだけの場ではなく、同じ境遇の仲間と知り合える場でもあったのである。

ぼくらが入ったときには、解放運動せなあかんというだけではなしに、行ったら楽しいなっていう……。上の人がボーリング連れて行ってくれたりとか、飲みに連れていってくれたりとか。悪いこともすりゃあ、楽しいこともいっぱいある。運動の勉強するときにはする。ただそれをひきずらんと遊ぼ、という感じで。

また、子ども会をとおして参加するようになった解放運動は、生まれ育った土地とは違う土地の人たちとの交流をもたらし、Mさんはそれをとおし

て視野を広げ、部落出身者としての社会的立場の自覚を深める。

> 集会なんかでは、よその土地にいきますよね。行ったことないところへ連れていってくれる。行ったら行ったでまた今度、仲間ふえてくる。そういう意識あったから。黄色いゼッケンつけてビラをまくのは、そら初めははずかしかったけど、ぼくらのころには、反対にやらなあかんのやという気持ちもあった。別にはずかしいとかそういう気持ちはなかった。反対に「あの子部落民や」て言われても、「部落民やったら何で悪いんや」っていう意識で。言われるいわれはないと、あんたらがまちがってるんやと。別に隠す必要もないし。

子ども会への参加、そして解放運動への参加のなかで、Mさんは同じ立場の人々との仲間意識、連帯意識を深めていくことになる。

> 運動の中で、部落民はみんな兄弟やっていう意識のもとで、何かあったときにみんなが寄るというような。差別事件があったときに糾弾会やるいうたら、みんなあつまってくる。それだけじゃないけども、近所のおじちゃん・おばちゃんとか、他人であっても、何かあったらそこに集まるというような。横のつながりは強い。ちがうところから来た人でも、やっぱりつながらなあかん、そういう意識は大事にしなければいけない。それが運動の原点だとおもうし。ひとりじゃ勝てん。集団でがんばる。一人は万人のためにというか、そういうつながりがあるから、運動もできるんやろうし、地域のコミュニケーションもとれる。

（2）解放子ども会の課題

Mさんは子ども会に中学生のときから参加をはじめ、高校生になってからは指導員のサポート役として後輩の指導にあたってきた。そして学校を卒業して市役所で仕事をはじめてからも、一方で子ども会の指導員を一貫して続けてきた。そうしたMさんの目には、今の子ども会の様子や子ども

たちの様子はどのように映っているのであろうか。

> 子どもも減ってきてますしね。とくに地区の子が減って来る中で、やっぱり専従としたらやりにくいところがあって。子どもおらん中で、学力向上もせなあかんし、子ども会の意義は部落問題教える中で差別に負けない子をつくっていくことなんやけど、現状ではきびしい面がある。自分たちのころのように、何というか結集の軸っていうか、そういうもんが持ちにくくなってますわね。

Mさんが子ども会で活動していたころとくらべて同和地区の状況も大きく変化した。以前は「貧しさ」が地区のなかでは共通しており、しかしそれゆえの隣近所の親しさ、助け合いの精神もあった。現在でも就職差別などから地区出身者で不安的就労を余儀なくされている人は多い。しかしそれでも以前にくらべると経済的にはそれなりに安定してきた。そうした状況の変化のなかで、親の子ども会に対する意識も変わってきたとMさんは言う。

> 悪いことおぼえるんではなしにね。部落問題でも、どんなふうに考えていかなあかんのか、どんなふうに生きていかなあかんのか、目上のもんが年下のもんに教えてくれるというか、それはそれでありがたい存在としてとらえてきたとおもいますよ。今でもそれはあるんやけど。でも以前にくらべると「子ども会行きや」という親の強制力っていうか、それが少なくなってるような気はしますよね。自分とこでやれるっていう気持ちもあるかもしれへんし…それでもやっぱり来る子は来ますし、来させる親は来さしますけどね。

また、被差別意識が希薄なってきている地区の子どもたちに対して、Mさんが指導員から提起されてきた、「部落出身者としての自覚と誇り」を投げかけても、「今の子どもたちにピンときていない」、そんな思いがMさんにはある。「地区外の子に投げかけているような、他人事のようなとこ

ろがある」といった違和感をおぼえる。「しかしそれも差別改善されてきた結果といえるのかもしれないし、なかなかむずかしいところです」と語る。

> 地域の中でもできる子もいればできない子もいる。できん子をどんだけ引き上げていくかっていうことをまず考えないかん。そういう中で、子ども会を昼間部に移して、週1回だったのが、3回か4回になった。ただ、やはり塾とかそういう絡みがあって、なかなかできん。ぼくらの考えやったら、勉強のためやったら、塾行くより、子ども会きて、直接先生から教えてもらうほうが、その子の能力に合ったやり方で引き上げていってもらうほうが、ベストやとおもうんやけど。塾って競争社会があるでしょ。同じことをみんな同じようにやる。中学や高校の段階でそういうことするのはいいとおもうが、小学生からだと差がひらいてしまうので、子ども会でその子に合ったやり方で教えてもらうのがいいと思う。部落差別をなくしていく子どもをそだてていくという面では今のところ不十分だとおもう。地域分散していく中で、親の子どもに対する部落問題の取り上げ方や、ぼくらやぼくらの上の年代が子ども会で教えられてきた形とちょっとちがってきているんじゃないかなあとおもう。

一方、「指導される立場」から「指導する立場」へとかわったSさんもまた、同様の思いをもっている。Sさんも最近の若い世代について、「かつて私の世代が中学生ぐらいのときとくらべて、環境改善もありますし経済的にも一定安定してきているので見えにくいですし、差別・被差別という意識が希薄になって、『部落民』という意識は弱くなっているのはたしかです」と述べる。自分たちが中学生のころの子ども会では、「自分の親の生い立ちそれ自身が部落差別の結果だということが整理されて入ってきていた」が、「いまの子にそうしたことを伝えても、なかなかピンとこないという状況がある」と言う。

部落差別は、たしかに以前にくらべて変化をしてきた。露骨なかたちで

の差別事象は少なくなり、子どもたちがみずからを「被差別者」と自覚する、そうした経験をすることも少なくなった。しかし部落出身者に対する差別がなくなったのかといえばそうではない。形や質をかえた差別事象は今でも多く報告されている。みずからのアイデンティティを、「被差別者」という位置づけでのみ子どもたちに措定させるような提起をすることにはSさん自身もとまどいを持っている。しかし厳然と存在している差別状況と、みずからが差別をうける当事者なのだという自覚を、若い世代に伝えなくていいはずがない、そうした葛藤の間でSさんは悩んでいる。

4．解放子ども会の今後

以前は、結婚差別がきわめてきびしい状況のなかで、結果として同じ地区の人どうしの結婚や、他の同和地区の人との結婚の割合が多かった。そしてそのことが、部落差別における「血族結婚」といった誤解や偏見を生む一因にもなってきた。しかし近年、同和地区出身者と地区外出身者の結婚は増加している。

全国各地の実態調査の平均によると1985年時点で夫婦とも地区出身の割合は全体の65.6%であったが、93年は57.5%であった。また、大阪府生活実態調査では1990年の時点で18.4%であった。

こうした同和地区出身者の婚姻状況のなかで、「部落解放運動を担う主体としての部落民」といった言説も、誰をもって「部落民」と規定するのかということも複雑になってきている。子ども会には、両親ともに地区の出身であるという子どもだけではなく、どちらかの親が地区外出身者、あるいは、両親ともに地区外出身者で結婚したあとに地区に越してきたという子どもの数も多くなってきている。こうした状況のなかで、教育現場においても、「解放運動の主体としての部落民」言説における「部落民」規定も捉えなおしの必要を迫られている。そしてこうした状況の変化が、子ども会の存在意義をも変化せしめているとSさんはいう。

私自身もよく学校に講演によばれたときなんかに言うんですけど、

誰が部落民だという規定はなかなかできにくくなっているでしょう。自分が部落民だと感じている子が部落民なんだというふうに私は言うようにしているんです。だから両親とも部落民でなくても部落解放運動に目覚めて、地域に住んで子どもを生んでここで大きくなったというのは本当は違いますよね。本当は違うのですけども、やはり子どもたちを自分は部落解放していくという、子どもたちも育っていますし。そういった意味では、子どもたちの気持ちを耕していったり人権問題を考えていくときにはそういった考え方を最優先していきたいなと思います。…外から規定するというか、中学生になって、「あなたは部落民なのだから部落民宣言しなさい」と短絡的に決めてしまうのではなくて、その子のなかで培ってきている体験とか考えといったところを大切にしたいなと。…例えば父が部落出身ではなくて母がそうだと、自分は父の側からいうと部落民ではないんだという生き方を選ぶのであれば、解放運動からいうと消極的ですけれども、それも一つの生き方として認めていってもいいのではないかと思うのです。

Sさんは現在、子ども会活動だけではなく、T地区における地域教育連携づくりの中心的な役割をはたしている。そうしたSさんにとって、地域の活動を担っていく人材の育成は大きな課題である。単に子ども会において教育をうけるだけではなく、Sさんや、あるいはMさんがそうであったように、いずれは自分が後進を指導していく、そうした人間づくりが大きな課題としてある。個々の子どもや若者の個性や生き方を尊重するということは、一方で地域に根をはって地域や後進のために貢献する人材が少なくなってしまうという現象をも招きかねない。生き方や考え方が多様化しているのは同和地区においても同様である。Mさんが述べるように、地区住民のなかに共通の生活課題――結集の軸を見出すことがなかなかむずかしくなっているという現状がある。そうしたなかで、若者の生き方を「地域への貢献や次世代育成の役割」ということに集約してしまうことはなかなかむずかしい。部落差別の相対的な減少は、部落に生まれ育った若者の生き方の選択肢の増加をもたらした。しかし一方でそれは地区住民の“物

理的・精神的分散化”を招いたという現象も一方ではある。こうした状況において、地域に根をはってがんばる人材をいかに育成するのかということが、子ども会にも突きつけられている大きな課題なのである。

> でも、いろんな場所やいろんな分野に地域出身の人たちが働いているという世の中を目ざしていかないと、部落出身者が参画していけるというか、やはりいろんなところに「僕はT地区の部落出身です」と、そういった立場の人間がいろいろな場面にいてくれるというか、そういったことが大切になってくるんじゃないかと思います。でも今この年になって思うのは、基軸はやはり自分が部落民だというところに戻ってこざるを得ないというか、障害者問題を考えるのもボランティアをしながら考えたりとか、「在日」の友だちの問題を考えたりしたときに、自分が部落民であるからこそ一緒の思いにたてた喜びも経験しているので。やっぱりそれが基軸だと。それを子どもたちにも若い子にも伝えていきたいです。

とSさんは語る。

むすび

SさんやMさんが子ども会に参加をしていた70年代から今日まで、日本社会全体が大きく変化をしてきたと同時に、同和地区のありようもやはり大きく変化をしてきた。そして地域や解放運動の明日を担う人材の育成に大きな貢献をはたしてきた子ども会もやはり変貌をせまられている。「部落差別からの完全解放」「地域の発展」ということと、「地区出身者の社会参加」が対立するのではなく、すべてが相互互換的に相乗効果的に解決にむかう、そうしたありかたをめざしてSさんやMさん、子ども会指導員の努力と模索が続けられている。

参考文献

大阪府同和教育研究協議会進路保障専門委員会 1999『大阪の進路保障――進路実態追指導調査報告・第27集――』

大阪府同和教育研究協議会 1999『大阪の子どもたち――子どもの生活白書――』

解放出版社編 1997『部落問題資料と解説 第3版』解放出版社

高槻市教育委員会 1988『富田地区の子どもの学力生活総合実態調査報告書』

原田琢也　1999「同和地区生徒のアイデンティティ問題」『大阪大学教育学年報』第4号　大阪大学人間科学部教育学研究室

部落解放・人権研究所 1999『図説 今日の部落差別――各地の実態調査結果より――第3版』解放出版社